慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	平安京風俗二題：災厄と田楽
Sub Title	Two chapters on Kyoto in the Heian Period
Author	川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1980
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.40, (1980. 9) ,p.75- 89
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集・ 文学と都市
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00400001-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平安京風俗二題

——災厄と田楽——

川上新一郎

一

予二十余年以来、東西の二京を歴く見るに、西京は人家漸くに稀らにして、殆に幽墟に幾し。人は去ること有りて来ること無く、屋は壊るること有りて造ること無し。其の移徙するに処無く、賤貧に憚ること無き者は是れ居り。或は幽隠亡命を楽しび、当に山に入り田に帰るべき者は去らず。自ら財貨を蓄へ、奔営に心有るが若き者は、一日と雖も住むこと得ず。——池亭記——

桓武天皇の延暦十三年（七九四）都遷りのことがあり、詔が発せられて以来、平安京の歴史が始まった。平安京は南北を走る朱雀大路によって東西二京に分かたれており、『拾芥抄』によれば、東の京（左京）を洛陽城、西の京（右京）を長安城と号するとある。言うまでもなく、洛陽・長安は中国の都であり、洛陽城・長安城という呼び名は平安京を中

国の都に模した呼び方である。しかし、現実には東西にかかわらず、平安京全体を時には洛陽、時には長安と称している。

そして東西二京のうち、東の京が、次第次第に発展をとげ、政治文化の中心としての役割を重くしていったのに対し、西の京は時が経つにつれ、むしろ衰微に向かい、人家もまばらとなり荒れるに任されるようになっていった。冒頭にかかげた慶滋保胤の『池亭記』は天元五年（九八二）に書かれたものであるが、平安時代中期の西の京の荒廃ぶりを鮮やかに描き出している。しかも、単に東の京が発展し、西の京はさびれているというだけではなく、そこに住んでいる人々のこの世での栄達の欲望が、この東西二京の繁栄と荒廃に見てとれることを指摘している。

少しでもこれからの出世に望みをかける人々は西の京には住みたがらず、そこに住んでいるのは、世の栄達の夢を捨てた落伍者や世捨人ばかりだ、と保胤はいう。

事実、平安時代の貴族の邸宅の分布状況を調べてみても、著名人所有の建物あるいは著名な建物はほとんど東の京に偏っていて、西の京にはめぼしい建物は極めて少ないのである。そして『池亭記』の作者保胤の池亭は、『拾芥抄』を見ると「六条〻坊門南、町尻東隅」とあるから、西の京にある例外的な建物ということになる。このことは勿論、保胤が意識的にそうしたのであり、若くよりその文才をうたわれながらも、その一方では勧学会に主道的役割を果たし、浄土信仰に関心が深かった保胤は『池亭記』を書いた四年後の寛和二年（九八六）年来の宿願であった出家を果たしている。『池亭記』にはすでにそうした保胤の隠棲を望む心情があらわれており、「殆に幽墟に幾」かった西の京にすみかを求めたのはそのためである。

それでは、こうした落伍者や世捨人の多かった西の京に対して、人口の密集していた東の京はどのようであったのだ

ろうか。もう少し『池亭記』で見てみることにする。

東京四条以北、乾・艮の二方は、人々貴賤と無く、多く群聚する所なり。
高き家は門を比べ堂を連ね、少さき屋は壁を隔て簷を接ぬ。
東隣に火災有れば、西隣余炎を免れず。南宅に盗賊有れば、北宅流矢を避り難し。

こうして、人口が多ければまた多いがゆえの災厄と悩みがあり、さらに貧家の人は勢家の様を見て卑屈になったり、うらやんだり、嘆いたりして、一時として心の休まる暇もないのである。ここは活気に満ちてはいるが、少し油断をすれば失意につき落とされる危険のある所である。

『池亭記』は必ずしも当時の京のありさまを描写することを主な目的としているわけではないが、結果的には、平安時代中期、摂関政治最盛期に至る平安京のありさまを鮮やかに描き出している。ある一画は没落した一家が去ったあと、誰にもかえりみられず荒廃にまかされ、またある一画は欲望を追い、また欲望に追われて一喜一憂する人々が群がり住んでいる。また、洪水、旱魃、疫病、火災等に悩まされる日々でもある。

一見華やかな平安京の裏にあるこのような陰をも見逃すことなく、その全体像を把握することは、女房文学のほとんどよくしなかったところである。それらを見るには、漢詩文・説話等男性の手になった文学によらなければならない。一篇の『池亭記』のとらえた京に住む人々の栄光と失意を女房日記や王朝物語はとらえなかったのである。

女房文学の描写は内裏を中心とし、ごくわずかな周辺の地域を点と線で結んで成りたっており、平安京全体を面とし

て蔽う視点に欠けている。

例えば、次の文を見てみよう。

八月十五夜、隈なき月かげ、ひま多かる板屋、のこりなく漏り来て、見ならひ給はぬすまひのさまも、珍しきに、あかつき近くなりにけるなるべし。隣の家々、あやしき、賤の男の声々、目さまして、「あはれ、いと寒しや」「今年こそ、なりはひにも、頼む所すくなく」「ゐ中の通ひも、思ひかけねば、いと心ぼそけれ」「北殿こそ、聞き給ふや」など、言ひかはすも聞ゆ。――源氏物語・夕顔――

これは、夕顔の巻で、五条辺の夕顔の仮寓で光源氏が夜を明かした翌朝の描写である。隣家から聞こえてくる貧しい人々の声によって、夕顔の居宅のわびしさとその境遇の貧しさを浮き彫りにする手法は心にくい。隣家の声がそっくり聞こえてくるような小さな家のたてこみ方は、『池亭記』の東の京の描写に「少さき屋は壁を隔て簷を接ぬ」とあるのに対応し、その描き方は『源氏物語』の方がはるかに印象的に切り取ってみせている。しかし、その一方で、『源氏物語』はそれを単なる背景描写として扱っており、人々の生活を思いやるまでには及んでいない。そこが、女房文学の特質でもあり、限界でもあって、先に、京を点と線でしか描かないと述べた理由である。

これに対して、漢詩文は、時として空疎な修辞に流れ、現実をその修辞の間からこぼしてしまうことがあり、一方、説話は人間への興味に傾きすぎる嫌いがあるが、それでも貴賤上下の人々の住む平安京の種々相をくり拡げてくれる点が貴重である。

『池亭記』が鴨長明の『方丈記』に影響を与えていることは周知のごとくである。特に『方丈記』では、『池亭記』が「或は東河の畔に卜ひて、若し大水に遇ふときには、魚鼈と伍となり、或は北野の中に住まひて、若し苦旱有るときには、渇乏すと雖も水無し。」などと比較的あっさりと描いた平安京の災害をなまなましく述べて「災厄の町」京都を強く印象づけているが、その前に次の一文を見ておこう。

いはんやまた命終の後は、塚の間に捐捨すれば、一二日乃至七日を経るに、その身膨れ脹れ、色は青瘀に変じて、臭く爛れ、皮は穿けて、膿血流れ出づ。鵰・鷲・鳶・梟・野干・狗等、種々の禽獣、擅み掣いて食ひ噉む。禽獣食ひ已りて、不浄潰れ爛るれば、無量種の虫蛆ありて、臭き処に雑はり出づ。悪むべきこと、死せる狗よりも過ぎたり。乃至、白骨と成り已れば、支節分散し、手足・髑髏、おのおの異る処にあり。

――往生要集――

保胤は既に述べたように浄土信仰が篤く、そうした信仰の表白として、貴賤の往生人を四二の伝に分けて記した『日本往生極楽記』を著わしているが、二十五三昧会等を通じて保胤に思想上の影響を与えつづけたのが源信である。

源信の『往生要集』は寛和元年（九八五）の成立で、「念仏の一門に依りて、いささか経論の要文を集」めたものであるが、その冒頭大文第一に描かれる地獄道以下六道の描写の酸鼻をきわめる有様は、経論の引用に満ちているとはいえ、単なる観念上の産物であることを越え、源信自身が実際に目に見、耳で聞いた平安京の姿を幾分か反映していると考えられる。引用したのは、そのうち人道の不浄の相を説いた部分であるが、打ち棄てられた屍体が次第に腐ってゆく

有様は、既に諸経論に見えるところとはいえ、不思議に生々しく、現実の京にしばしば見られたものであろう。

この『往生要集』冒頭の六道の記述は、その強烈さの故に、多くの人々に忘れ難い印象を与え続けてきたが、それが単に別の世界のことではなく、自分たちが身を置いているこの世界にもあるという考え方もまた、多くの人によって感じとられていたのである。例えば、平康頼の『宝物集』はこの『往生要集』の不浄観にふれて、「恵心僧都は、此不浄観ならずは、つねに塚の間にのぞみて、死人のかばねをみよ、とはおしへ給へり。」と述べている。ここでは、『往生要集』で心に描くべき相とされた情景が、現実のものに転化されている。平安京の中に打ち棄てられた屍体が不浄観を得るための教材としてとらえられており、それはまた、京中には見ようと思えば、疫病その他で倒れた人々が多く見かけられたということを意味するのである。

そうした累々たる屍を容赦なく描いてみせたのが『方丈記』である。

築地のつら、道のほとりに、飢ゑ死ぬるもののたぐひ、数も不知。取り捨つるわざも知らねば、くさき香世界にみち満ちて、変りゆくかたちありさま、目も当てられぬこと多かり。……また、母の命尽きたるを不知して、いとけなき子の、なほ乳を吸ひつつ臥せるなどもありけり。仁和寺に隆暁法印といふ人、かくしつつ数も不知死ぬる事を悲しみて、その首の見ゆるごとに、額に阿字を書きて、縁を結ばしむるわざをなんせられける。人数を知らむとて、四・五両月を数へたりければ、京のうち、一条よりは南、九条より北、京極よりは西、朱雀よりは東の、路のほとりなる頭、すべて四万二千三百余りなんありける。

これは、養和二年（一一八二）の春から夏にかけての疫癘の時の有様であるが、ここでは災害に加え、戦乱も人々の生活をおびやかし、事態は一層深刻なものがあったと思われる。そして、ここに書かれた情景と、先に引用した『往生要集』の不浄の相とを比較すれば、それらが実によく似ていることに気がつくであろう。『往生要集』の不浄の相は現実そのものなのである。

隆暁法印の調査によれば、養和二年の四月と五月の二箇月間に京の死者は四万二千三百余人とあるが、対象とした地域は「京のうち、一条よりは南、九条より北、京極よりは西、朱雀よりは東」とあるから、要するに東の京全部ということになり、『池亭記』が「幽墟に幾し」と評した西の京は、「もろもろの辺地」の中に入れられて、法印の視野にはいっていないのである。

いずれかといえば恵まれた人々が住み、にぎわっていた東の京でさえ、一度疫病が発生すれば、このような地獄絵さながらの光景となるのである。それが平安京の現実であった。

『方丈記』にはこの他の災厄として、火災・辻風・飢饉・地震の有様が書きとめられているが、ここでは省略に従うことにする。

二

しかし、平安京の人々は災厄におびえ惑ってばかりいたわけではない。ある日突然全ての人があるものに熱狂し、大挙して街路にくり出すこともあった。

永長元年の夏、洛陽大いに田楽の事あり。その起こる所を知らず。
初め閭里よりして、公卿に及ぶ。
高足・一足・腰鼓・振鼓・銅鈸子・編木、殖女・春女の類、日夜絶ゆること無し。
喧嘩の甚だしき、よく人耳を驚かす。
諸坊・諸司・諸衛、おのおの一部をなし、あるいは諸寺に詣で、あるいは街衢に満つ。一城の人、みな狂へるが如し。けだし霊狐の所為なり。……
六条・二条、往復すること幾地、路に埃塵起こり、人車を遮る。
近代奇怪の事、なにを以てこれに尚へん。――洛陽田楽記――

白河院の院政が布かれていた永長元年（一〇九六）のことである。京では不思議な騒ぎが起こった。五月ごろからにわかに田楽が広まったのである。貴賤を問わず多くの人々が田楽を行いながら、狂ったように町にくりだし、このために街路は人であふれ、車馬の通行もままならなくなった。これが世に言う永長大田楽である。ある人はこれを「霊狐の所為」と言い、またある人はこれを「時の天言の致す所か」と評したが、真の原因はよくわからない。しかし、『濫觴抄』がこれについて興味ある説をのせている。その『濫觴抄』の説とは次のようなものである。

この年の三月七日、住吉の神主津守国基は、多くの僧を招き、自ら建立した荘厳浄土寺の落慶供養をはなばなしく行った。国基は住吉社中興の祖といわれる人物で、有力貴族との交渉もあり、また歌人としても名のあることは周知の如くである。

ところが、その落慶供養の際、集まりすぎた群集を整理しようとしている最中に、混乱が生じて橋が壊れ、多くの人が池に転落して溺死するという不祥事がおこった。この事件は、国基にとって生涯の痛恨事であったわけであるが、事件はそれだけに止まらず、影響は意外な方面に及ぶことになった。というのは、現場に居合わせて死穢に触れた僧俗多数がうかつにもそのまま参内したため、京中ことごとくが触穢となり、諸社の神事が全て延引もしくは中止されるという思わざる事態になったからである。

ところが、その延引された神事の一つである松尾祭に関して、松尾明神は延引を承知せられないとする童謡が一般に広められ、有名な松尾祭の田楽が延引の決定を無視して多数社にくりこみ、それが永長大田楽の引き金になったという。

『濫觴抄』のとなえる永長大田楽の発端は大体以上のようである。『濫觴抄』という書物自体はそれほど信頼できるものではなく、従って、この永長大田楽の原因なるものもその実否は不明である。しかし、爆発的ともいえる田楽の盛行の様を考えてみると、何か具体的にこれと言えない原因につき動かされて多くの人々がくり出しており、その真の原因は誰にもわからなかったのではないかと思われる。そして、この田楽騒ぎは宮中にも飛び火して、内裏や院で殿上人が田楽を行って見せるに至った。

この熱狂振りを記録したものに、藤原宗忠の日記『中右記』と大江匡房の『洛陽田楽記』がある。

藤原宗忠は道長の二男頼宗の曾孫に当り、中御門右大臣とよばれている。大部な日記『中右記』を残しているが、それからうかがえる宗忠の人間像は、頗る勤勉・生真面目で有能な官僚としての姿である。しかも故実に詳しく、それに執拗にこだわる保守的立場も見てとれる。

永長大田楽に対する宗忠の態度は『中右記』にしばしばあらわれるが、懐疑的であり、むしろ批判的であった。六月十二日条から引いてみる。

> 此十余日間、京都の雑人田楽を作し、互に以て遊興す。なかんづく昨今諸宮諸家の青侍下郎等、皆以て此曲を成し、昼は則ち下人、夜は又青侍、皆田楽を作し、道路に満盈し、高く鼓笛の声を発し、已に往反の妨と成る。いまだ是非を知らず。時の天言の致す所か。

宗忠にとってこのような訳のわからない騒ぎは不快なものであり、不吉に感じられたものと思われる。しかし、その宗忠も白河院と郁芳門院が田楽に熱中し、院で田楽が行われるようになると、遂に殿上人の田楽を見物させられる破目になるのである。

一方、当代随一の文人であった大江匡房はこの永長大田楽の騒ぎの時は、従二位権中納言で五十六歳であった。おそらく『洛陽田楽記』はこの騒ぎがおさまってまもなく書かれたものであろう。

代々学儒であった大江家の出身である匡房が公卿にまで昇ることができたのは、匡房自身の才学に並み並みならぬものがあったことはもちろんであるが、後三条・白河・堀河と三代の東宮学士をつとめ、ことに白河院の信任が厚かったことによっている。しかし、晩年の匡房は学儒としての忠実な官僚生活に倦んでいたように思われる。その傾向は『洛陽田楽記』を書いた永長ごろから既にきざしているようであるが、殊にはっきりとそれが現われたのは、長治三年（一一〇六）三月に二度目の大宰権帥に任ぜられながら、老齢と病気を言い立て、遂に赴任しないで終わったことである。

しかも、自宅に引きこもって出仕せず、訪れる人ごとに世間の雑事を聞いて書きとめていたという。『中右記』の中で、宗忠はそうした匡房の振舞いを、大儒にあるまじきこととし、甘心しないと非難している。

また、匡房はその死の直前に、自らの日記『江記』を焼き棄てさせている。

こうした晩年の匡房の行動を見ると、白河院の信頼厚い、才学並びなき学儒としての名声に無頓着、無感動になっている様子がうかがえる。晩年の匡房は栄誉に包まれながら寂しかったのではあるまいか。

その原因の一つは、匡房が最も期待をかけていた一子隆兼に、康和四年（一一〇二）先立たれたことによる。宗忠が子孫に故実を伝えるため、『中右記』を清書し直したり、部類したりしているのに対し、『江家次第』という有職故実の大著をなした匡房が、故実の資料がぎっしりつまっていたであろう『江記』を焼き棄てさせたことは、後を托すべきすぐれた子孫を持ちえなかった悲しさがあらわれているようである。

しかし、匡房が晩年政務に飽いた原因は、単に一子隆兼の死のみではなさそうである。既にそれ以前、『洛陽田楽記』を書いた頃から、匡房の心は世間の雑事に向かいつつあったと思われる。それは、匡房の友人で、漢詩文にすぐれた文人たちが次々と世を去り、時の流れの中に、文運の衰えが見てとれるようになってきたからである。『暮年記』の中で、匡房は「ここに頃年より以来、かくのごときの人、皆もて物故したり。文を識るの人、一人の存るものなし。」と言い、「寛治より以後、文章はあへて深く思はず、ただ翰墨の責を避がるらくのみ。」と述べている。自分の真価を知ってくれるものがいなくなったという空しさが匡房の心に宿っていたのである。

『洛陽田楽記』を書いたころから、匡房の著作には、公的でない、文辞に凝らないものが俄かに数を増してくる。『続本朝往生伝』『本朝神仙伝』の二つの伝の他、「記」と名づけられたもののうち、『遊女記』『傀儡子記』『対馬貢銀記』

『筥崎宮記』等世態風俗に関心を持ち、それを写した作は、大旨この時期のものと認められている。

晩年政務に倦んだ匡房は何故こうした文筆活動に向かったのであろうか。

人は老いを迎えると饒舌になる。一篇の詩、一首の和歌に自らの思いを托してよしと思うのは若者の考えであり、老人は自らが過去に見たもの全てを何とかして語り尽くそうとするもののようである。そうした老人の心境に最もふさわしい文学形態はおそらく説話ではあるまいか。現在伝えられている説話集はその多くがその編者を詳らかにしないが、編者・成立年代の判明するもの、また判明はしなくとも種々の徴証から、編者が老年であることをうかがわせるものが多い。

それは、単に説話の収集に歳月がかかるというだけではあるまい。見聞したこと全てを語り尽くす説話という形態が、すでに老人のものなのであろう。

匡房の晩年にも明らかにそうした傾きが見てとれる。注文に応じたおびただしい願文類の作成の間を縫って書かれるのは、かつての華麗な四六駢儷文ではなく、平易な、技巧を捨てた文章である。しかも世間の雑事にかかわるものが多い。

説話的興味で書かれたものとしては、『続本朝往生伝』『本朝神仙伝』の二著に加えて、談話の筆録である『江談抄』があり、『狐媚記』もその中にはいろう。

一方、芸能者に対する興味で書かれたものとしては、『洛陽田楽記』を初め、『遊女記』『傀儡子記』がある。

宗忠に大儒の行いとしては甘心しないと非難されながらも、匡房は晩年の文筆活動の対象として世間の雑事を記録する道を歩んだのである。『洛陽田楽記』はそうした作のうち、時期的に比較的早いものに属する点注目される。

しかしながら、『洛陽田楽記』を見ると、その文辞はやや淡白に過ぎ、平安京全体が異様な興奮と熱気に包まれた様子をうかがうには物足りない感がするのも否めない。その記述は力めて抑えた調子に終始し、『中右記』の記述態度と大差なく、単なる記録にとどまっている。これでは芸能研究家を喜ばせるだけである。

もっとも、この点に関しては『洛陽田楽記』はこの種の匡房の作のうちでは一番精彩を欠いており、『遊女記』や『傀儡子記』の方が幾分なりとも対象への共感が認められ、生き生きとしているようである。

おそらくその原因は、『洛陽田楽記』の末尾にもふれられている郁芳門院の崩御にかかわっているのではあるまいか。白河院の皇女で、殊に院に鍾愛された郁芳門院は、もともと病弱であったが、この田楽騒ぎに熱中されたのが原因となって、八月七日二十一歳で崩御された。田楽騒ぎはこれを契機に急速に収束している。

このことが、匡房の心に影を落として、田楽の描写に精彩を欠く原因となったのではあるまいか。

それはともかく、庶民の芸能を書き留めたものとしては、匡房以前に既に藤原明衡の『新猿楽記』があり、匡房の『洛陽田楽記』『遊女記』『傀儡子記』はいずれもその影響下にあると思われるが、こちらの方はその描写の天衣無縫振りが際立っている。

『新猿楽記』はその題とは異なり、猿楽の様を述べているのは冒頭の部分のみで、大部分はその猿楽を見物に来た西の京の住人で右衛門尉である人の一家の説明描写に費されている。そこには右衛門尉の妻妾三人、娘十六人とその婿達、息九人が次々に描かれ、一種の物尽くし、職人尽くしになっている。その文は四六駢儷文を基としているが、しばしば格を外れた感があり、猥雑、滑稽味にあふれていて、その生々しさは『洛陽田楽記』の比ではない。

第一の本妻は、齢すでに六十にして、紅顔漸く衰へたり。夫の年は僅に五八に及びて、色を好むこと甚だ盛なり。

蓋し弱冠にして公に奉りし昔は、偏に舅姑の勢徳に耽り、長成して私を顧る今は、ただ年齢の懸隔なることを悔ゆ。

首の髪を見れば皤々として朝の霜のごとし。面の皺に向へば畳々として暮の波のごとし。

上下の歯は欠け落ちて飼猿の顔のごとし。左右の乳は下り垂れて夏牛の閠に似たり。

ここでは『洛陽田楽記』のような記録性はなく、一種物語としての虚構化がはかられているが、物尽くしの一つ一つはかなり正確な百般の知識に支えられており、人々の生活を絵巻物のようにくり拡げて見せる面白さがある。明衡は匡房と同じく学儒であるが、匡房と違い、代々の学儒の家柄ではなく（明衡以後学儒の家となる）、そのための苦労もしているようである。『新猿楽記』の成立年代については、明衡の若い頃とする説と、晩年とする説があり不明であるが、その内容はやや変り者であったらしい明衡の一面をのぞかせている。

この『新猿楽記』と比較すると、匡房が世間の雑事を記録した説話や文は、やはりその才学と教養を反映してか、端正な感じで、世態風俗を描いては中途半端である。たとえば、『江談抄』の個々の説話の語り口の魅力は、ほぼ同時代に編集が進行していたであろう『今昔物語集』と比較するのは無謀としても、『江談抄』の影響を色濃く受けて成った『古事談』の魅力にも及ばない。

その辺りに、晩年の匡房の世間の雑事を見つめ、表現する能力の限界を見てとることができよう。しかし、老いの中

で今までとは違った対象を捉えて文筆活動をした匡房の方向は認められるべきであろうと考える。

〔付　記〕

本稿は読み易さを考え、漢文は全て訓み下し文を用い、訓み下し文は大旨先学の訓みを使わせていただいた。また本文に注は一切付けなかった。従って、以下に使用テキストと主要参考文献を掲げて謝意を表することとする。

『池亭記』（日本古典文学大系『懐風藻文華秀麗集本朝文粋』）
『源氏物語』（日本古典文学大系『源氏物語一』）
『往生要集』（日本思想大系『源信』）
『宝物集』（古典文庫九冊本）
『方丈記』（日本古典文学大系『方丈記　徒然草』）
『洛陽田楽記』（日本思想大系『古代中世芸術論』）
『中右記』（増補史料大成）
『暮年記』『新猿楽記』（日本思想大系『古代政治社会思想』）
『往生伝　法華験記』（日本思想大系）
池田龜鑑氏『平安時代の文学と生活』（昭41刊）
川口久雄氏「平安後期の漢文学」（「国文学　解釈と教材の研究」昭40・3）
川口久雄氏『大江匡房』（人物叢書、昭43刊）
大曾根章介氏「藤原明衡論」（「国語と国文学」昭33・3）
大曾根章介氏「藤原明衡の壮年時代――省試をめぐる事件を中心にして――」（「中央大学国文」16、昭48・3）
戸田芳実氏『中右記　躍動する院政時代の群像』（昭54刊）